

## ノーラ・ゲーデケ『ライプニッツと彼の文通』（2017年11月、 学習院大学人文科学研究所における講演）翻訳と解題

増 山 浩 人

### 論文要旨

2017年11月9日、ノーラ・ゲーデケ博士は招待講演「ライプニッツと彼の文通」を学習院大学人文科学研究所にて行った。本稿はその招待講演の日本語全訳である。周知のように、ライプニッツは同時代の学者の中でも最も広範な書簡作品を遺した。彼は約1300人と文通をし、彼が取り交わした手紙の総数は約20000通にも上る。通常、彼は文通によって主にニュートンなどの遠隔地に住む同時代の有名学者と学術討論を行っていたと考えられてきた。これに対し本稿では、ライプニッツの書簡の定量分析によって以下の二点が示される。1) 彼の文通のかなりの部分がハノーファーやその近郊の諸侯や教授たちとの交流のために行われていたこと、2) 彼が学術討論だけではなく、情報収集のためにも文通を行っていたこと。以上の議論を踏まえ、本稿はライプニッツ書簡の研究がバロック時代の手紙文化と学者の共和国の実態を解明する手がかりになることを明らかにした。

**キーワード**【ライプニッツ、文通、学者の共和国、ネットワーク、手紙文化】

### 【訳者解説】

本稿の著者ノーラ・ゲーデケ（Nora Gädeke）博士は、ハノーファー・ライプニッツ文書室学術研究員として、アカデミー版ライプニッツ全集「第I系列：一般・政治・歴史書簡」の編集・調査を担当してきた。さらに、ゲーデケ博士は「歴史家としてのライプニッツ」、「ライプニッツとヘルムシュテット大学」、「ライプニッツの文通活動」などのテーマに関して多くの論文を著している。

ゲーデケ博士は、2017年に「平成29年度学習院大学客員研究員」（受入研究者：酒井潔教授）として初来日し、二つの講演を行った。すなわち、「ライプニッツと彼の文通（Leibniz und seine Korrespondenz）」（2017年11月9日、於：学習院大学人文科学研究所）と「「理論と実践」：歴史家ライプニッツの工房における史料編纂作業（„Theoria cum Praxi“: Quellenarbeit in der Werkstatt des Historikers Leibniz）」（2017年、日本ライプニッツ協会第9回大会、於：学習院大学中央教育研究棟国際会議場）である。本稿は前者の講演原稿の改訂版の日本語全訳である。（なお、後者の講演については、酒井潔教授による日本語訳が日本ライプニッツ協会の機関誌『ライプニッツ研究』5号、2018年、27-64頁に掲載されてい

る。)

では、本稿の概要を確認しよう。まず、講演の前半部ではライプニッツの文通活動の基本的な性格が概説される。ライプニッツは約 1300 人と文通を交わし、彼が取り交した手紙の数は 20000 通にも上ると言われている。しかし、なぜ彼はそのような膨大な規模の文通活動を行うことができたのだろうか。もちろん、一番の理由は彼が文通を重要視していたことにある。

しかし、ゲーデケ博士によれば、間接的な理由もあるという。それは、ライプニッツがハノーファー宮廷で働いていたことである。他の学者は、当時はまだ郵便料金が高かったため、それほど多くの書簡を送ることができなかった。ところが、ライプニッツは宮廷郵便を無料で使うことができた。そのため、彼は郵便料金を気にせず大量の書簡を送ることができたというのである。それに加え、宮廷人という職務の性質上、ライプニッツ自身が手元に残っていた書簡は死後ただちに封印され、散逸を免れた。つまり、ライプニッツが宮廷人であったことこそが、彼が大規模な文通活動を行うことができたこと、さらにその文通活動の所産が現在に至るまで良好な状態で保存されたことの遠因なのである。

講演の後半部では、様々な実証的なアプローチを使いながら、ライプニッツの文通活動の具体像が明らかにされる。その中でも特に注目すべきなのは、ライプニッツの書簡の定量分析である。通常、ライプニッツは遠隔地に住む著名な学者と学術討論を行うために文通をしていたと考えられてきた。しかし、ゲーデケ博士によると、ライプニッツの書簡のかかなりの部分が実はハノーファーとその近郊の諸侯や教授達との交流のために行われていたという。さらに、彼が文通を行っていたのは学術討論だけでなく情報収集のためだともいう。つまり、ライプニッツの文通活動には、ライプニッツの学者としての活動のみならず、宮廷人としての活動も色濃く反映されているのである。以上の議論を踏まえつつ、本稿は、ライプニッツの書簡研究はバロック時代の手紙文化と学者たちのコミュニケーションの実態を知るために不可欠であるという結論に到達する。

確かに、ライプニッツの書簡は国内でも多くの研究者によって参照され続けてきた。しかし、それはあくまでも彼の思想内容やその変遷を知るためであって、彼の文通活動そのものに焦点を当てる日本語研究はほぼなかったと言っている。それゆえ、本稿は、こうした研究史上の空隙を埋めるための格好の資料になるはずである。

最後に、翻訳の方針について補足したい。本稿のドイツ語原稿は酒井教授への丁寧な謝辞から始まり、その後も一貫して講演向きの話し言葉で書かれている。この点を反映するために、本文・注ともに全て「ですます調」で訳出した。また、注はきわめて充実している。そのため、これ以上補うべき情報はないと判断し、訳者による補注はつけなかった。

【講演原稿】

「ライプニッツと彼の文通」<sup>1)</sup> ノーラ・ゲーデケ

今日この場所で皆様を前にして講演できることは、私にとって格別に栄誉なことです。皆様にとっても感謝いたします。また、私は酒井教授にきわめて感謝しております。私を日本に招待し、日本でとても素晴らしい滞在をお世話してくださり、本日の講演会を開催してくださったのですから。また、増山博士にも感謝いたします。すでに講演原稿を見事に翻訳してくださり、今はその出版に向けて尽力してくださっているのですから。

私はゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツと彼の文通についてお話します。つまり、この万学者の書簡作品を話題の中心にすえます。この話題は、ごく最近酒井教授のおかげで、皆様にとって身近なものとなりました。つい最近完結した教授の監修による日本語のライプニッツ著作集は、文通にもかなりの紙面を割いているのですから<sup>2)</sup>。残念ながら、私は日本語力の欠如からこれまでこの著作集を詳細に検討することはできませんでした。しかし、酒井教授は、親切なことに、私にたびたびこの著作集のことをお話ししてくださいました。ですから、私はこの著作集についてわずかばかり聞き知っています。そして、私はこの著作集がライプニッツ書簡の研究と叙述において新たな道を明示したことも存じているのです。

酒井教授と議論した問題の中には、私の講演でも詳しく扱うものがあります。私は講演で文通の内容に関してはそれほど扱いません。むしろ私は、文通の「人生における居場所」を、バロックの書簡文化の枠内で、典型的な特徴と例外的な特徴を備えたものとして、提示するつもりです。そのような考察の仕方が可能なのは、この書簡作品が多くの点で特別なものであるからにほかなりません。つまり、この書簡作品が偉大な万学の人に由来するからだけではなく、(そして、この観点は今重要な位置を占めますが) 格別によい状態で伝承されているからなのです<sup>3)</sup>。

\*

「書簡の共和国における最良の市民かつ最も熱心な信奉者の一人」

ライプニッツの生きた時代(1646-1716)、つまりバロックと初期啓蒙の時代は、学術的な書簡文化の最盛期でした。(イベリア半島を除く)「全ヨーロッパ」は、宗派対立と国境を越えて、学者の共和国という非公式集団に組み込まれていました。この非公式集団は、宮廷の世界に対する「反世界(Gegenwelt)」を演出しており<sup>4)</sup>、学問史においては「近世初期の学

者文化の交渉史」のための「中心的役割を果たしていました」(マリアン・フュッセル)<sup>5)</sup>。コミュニケーションの中核を担っていたのは書簡でした<sup>6)</sup>。報告の交換、問い合わせの転送、公刊著作やより小さな書き物における未公開のテーゼの批判的討論に関して、書簡は学術的交流の主導媒体かつ実験室となっていました。つまり、書簡は、書籍市場の外にある半公共空間だったのです。確かに、書簡は学術雑誌の出版数が増加するにつれて下火になってはいましたが、それでもまだ学術雑誌に取って代わられたわけではありませんでした<sup>7)</sup>。書簡には独自の法則がありました。学術的な論争文化に関する諸調査において、ゼバスティアン・キューンがライブニッツとドニ・パパンの活力論争を手掛かりに提示したのは、いかにこの論争が学術雑誌から書簡へ移行したことによって緩和されたかということです。公共的な論争の闘争的な原理に代わり、友情のレトリックに規定された書簡の交換が行われたからです<sup>8)</sup>。

この精神的な共同体がどれほど強い影響力を持っていたのかは、とりわけこの共同体に疑念が投げかけられている時によくわかります。例えばそれは、スペイン継承戦争の時代に敵対する側との文通が禁止されていた時です。ライブニッツの文通も、この禁令に触れていましたが——、同時にいかにこの禁令を潜り抜けることができたのかという点に関する諸事例を提供してくれます<sup>9)</sup>。ライブニッツ自身は「書簡の共和国における最良の市民かつ最も熱心な信奉者の一人」(ジェームズ・M・レヴィン)と呼ばれました<sup>10)</sup>。確かに、彼の著作は、生前はほぼ何も印刷されませんでした。しかし、すでに書簡が彼を主役の一人にしていたのです。

＊ ＊

## 「17世紀ドイツの書簡執筆術に関する最も広範な収集体」

周知のように、この書簡作品は実に壮麗で絢爛なものです。文通相手の数(おそらく1300人以上)ならびに書簡の数(約20000通)、空間的な広がり(中央・西北ヨーロッパを超えて、さらに中国に至るまで)、(宮廷ならびに学者の領野から見た、しかし、また他のあらゆる住民階層から見た)文通相手の全景、書簡に反映されている数十年以上続いている実際関係、扱われている主題の多様性といったことから、そう言えるのです<sup>11)</sup>。

しかも、この膨大な量の書簡は格別に良い状態で伝承されています。成人してからずっと、ライブニッツは書簡を常に手元に残してきました。彼に宛てられたものは体系的に、彼がしたためたものは、選択的に大抵は草稿の形で手元に残し続けてきたのです。ハノーファー宮廷において彼が行っていた職務を理由に、1716年に彼が亡くなった後、彼が遺した文書類は封印され——このことによって保存されることになりました<sup>12)</sup>。ゴットフリート・ヴィ

ルヘルム・ライプニッツ図書館（GWLb）において——この図書館はかつてライプニッツ自身によって運営されていた侯爵家図書館の後継の一つなのですが——この遺産は今日に至るまで、いわば彼にふさわしい場所で、伝承されています<sup>13)</sup>。それらの文書類に付随しているのが、多くの「副次的な遺稿」です。これらの遺稿は、ライプニッツの旅行によって生じたものや、後に移管されたことで生じたものもあります<sup>14)</sup>。さらに——網羅的と言うには程遠いのですが——受取人側からの伝承も付け加わります。それは、今ヨーロッパやアメリカの図書館や文書館で（あるいは、初期の印刷物の形で）保存されている文通相手宛のライプニッツの書簡です。

ライプニッツは、同時代において、決して唯一の偉大な書簡の著者だったわけではありませんでした。他の学者達もきわめて広範な書簡を持っていたに違いありません。こうした書簡の多くについて我々はまだ伝聞でしか知りません<sup>15)</sup>。したがって、我々が、彼の書簡という、（私の忘れがたき同僚ゲルタ・ウタメーレンがかつてこう表現したのですが）「17世紀ドイツの書簡執筆術に関する最も広範な収集品」<sup>16)</sup>を手にするに至ったのは、数々の恵まれた事情によるものだったのです。しかしもちろん、特にライプニッツはそのための必須条件を自らの手で満たしていました。つまり、集中的な執筆活動によってです。「精力的に」執筆を行った日には、5通かそれより多くの書簡が彼の手から伝承されていることもあります<sup>17)</sup>。

きわめて恵まれた職場環境も彼の書簡執筆を後押ししました。宮廷人であったライプニッツは、ハノーファーで、また一部ベルリンでも、無料で宮廷郵便を利用することができました。これは、かなり経済的な助けになったことでしょう。通常、郵便代は、学者の家計をきわめて圧迫し、文通に制約を与えるものでした。おそらく、ライプニッツはこの特権があったからこそ、文通をこのような範囲で行うことができたのでしょう<sup>18)</sup>。このことは、ある職員の書類からも説明することができます。その書類とは、ある四半期のハノーファーでのライプニッツの家計における支出の一覧表です<sup>19)</sup>。この一覧表で、郵便料金は、（宮廷郵便を経由して届かなかった残りの書簡の料金だけでも）、最上位を占めています。郵便料金は、蠟燭と薪代（つまり光熱費）をはるかに上回っているのです。

ライプニッツのこの特権は他の人々にとっても役立ちました。自分宛の書簡がライプニッツ経由で送られるため、学者の共和国のかなりの数の市民が郵便料金を減らすことができたのです。差出人はハノーファーより先の料金だけ負担しなければなりませんでした。こうしたことを行っていたのはライプニッツだけではありませんでした。封印されたままであれ、開封した状態であれ、仲介人を通して書簡を発送することは、学者の共和国の慣例でした<sup>20)</sup>。第三者を書簡配達に介入させることで、交際関係を拡張することができます。つまり、小さなネットワークが生じるのです。純粹に書簡配達にのみかわるタイプのネットワークもありました。また、第三者を読み手として引き入れることでのコミュニケーション空



間を、つまり仲間内でのコメントを反映しているネットワークもありました。シュテファン・ヴァルトホフは、多くの人々の手を経て届き、潜在的に読み手に開かれている書簡における「潜在的な公共性」について語りました。—そして同時に、どのようにしてこの公共性を隠蔽の技術と暗黙の通知によってふたたび制限できたのかも示しました<sup>21)</sup>。そのような郵便にかかわる問いを手引きにして、学者の共和国の「内面生活」に光を当てることができます。

文通することに自らの人生の中心的な価値があると、ライプニッツは自身で明言していました<sup>22)</sup>。すでに若年期に、彼は文通関係を体系的に構築していました。没年に至るまで、彼は新たな文通相手を探していました。文通の発展に関するゲオルク・ガーバーの手による皆さんご存じの図版<sup>23)</sup>は、数十年間にわたり、文通相手が十分増加し続けていたことを示しています。大旅行や、パリ、ロンドンといった首都での滞在、イタリア旅行の後にとりわけ人数が増加したことにより、1700 年頃の数年で文通相手の人数は頂点に達し、1 年につきおよそ 200 人と書簡を交わしていました。その後、彼が死ぬまでの最後の 10 年間にその人数は緩やかに減少しています。おそらく、以上の計算結果は今後多少修正されるでしょう<sup>24)</sup>。というのも、まさに（大がかりなウィーン旅行の後の）彼の人生の最後の 2 年間、文通は再度 1700 年頃の水準で行われたと言ってもよいからです。しかし、この点についてはアカデミー版が最終結論を下すでしょう。——書簡の編集作業は、約 20 年後にはじめて完了する予定です。（今のところ、編集作業はまさにライプニッツの人生の最後 10 年間の初めに到達したところですよ<sup>25)</sup>）。

アカデミー版からはライプニッツの文通がきわめて大規模であったことが裏付けられます。しかし、ライプニッツ像も、常に文通によって規定されてきました。（実際のスケールではなかったものの）、文通が広範に及んでいたこと、文通が学者および公爵家の親族と交わされていたことは、同時代人にも既知のことでした<sup>26)</sup>。そして、文通活動は、世間からも直接ライプニッツの特徴とみなされています。この特徴には、常に純粋に肯定的な評価が伴っていたわけではありません。ですから、批判的な主張もあります。その主張とは、職務上の課題<sup>27)</sup>や著作の出版が書簡によって背後に退けられてしまったというものの、あるいは総じて書簡にあまりにも多くの時間が費やされてしまったというものです<sup>28)</sup>。彼の同僚エックハルトが自らのライプニッツ小伝において下した判定はその典型例と言ってよいでしょう。「彼の書簡はきわめて膨大で、彼からきわめて多くの時間を奪いました。ヨーロッパの高貴な学者はみな彼に書簡を送っていましたし、より浅薄な者達が彼に書簡を宛てた場合にも、彼は常に彼らに返信し、情報を与えていました」<sup>29)</sup>。ライプニッツ自身さえも、（ここで念頭に置かれているのは、自然科学に対する彼の関心ですが）、書簡が自身の関心のための時間を奪っているとき折嘆いていることがあります<sup>30)</sup>。しかしその一方で、書簡が彼の知的伝記や思想、作品集にとって重要だと強調する証言もあります。この点は、彼は印刷された著

作よりも書簡で語るのが常であった、という周知の証言において明確に表現されています<sup>31)</sup>。このことでライプニッツ自身が表現していたのは、(書籍市場ではなく) 文通こそが彼固有の公共空間だったということです<sup>32)</sup>。

ライプニッツの思考が対話的と特徴づけられる場合、この特徴づけは、彼の書簡作品に由来します。「ライプニッツは最も大きく多彩な文通相手を保持した近世初期の思想家です。彼はこれらの文通相手と広範な学問領域における圧倒的に多彩なトピックについて議論したのです」(マルセロ・ダスカル)<sup>33)</sup>。書簡集の主題の多様性において、実際、当時の知の全領域が代表されています。ゲルタ・ウタメーレンの証言によれば、文通を作品集の「不可欠の構成要素」とみなすことができます<sup>34)</sup>。実際、哲学、数学、天文学、自然学、自然諸科学、神学、自然法学、政治理論と経済学、歴史とその補助学、言語学、民族学と考古学、地質学、技術、音楽論に関しては、その通りです。しかし、学問の組織、書籍市場、雑誌と図書館制度、日々の政策や教会政策に関しても、諸著作においてもしばしば(学術的かつ実践を目指して)言及される討論と戦略が書簡に映し出されているのです<sup>35)</sup>。とりわけ、哲学者であり数学者、というすでに確立されたライプニッツ像は、基本的には、形而上学、自然哲学および微分法に関する大量の書簡での議論に基づいています<sup>36)</sup>。ライプニッツ受容の初期において、つまり、諸著作がようやく少しずつ印刷されていた頃には、何よりも書簡集こそが、ライプニッツの思想に関する専門知を提供していたのです<sup>37)</sup>。

しかし、この内容上の観点も重要ではありますが、私の講演ではあまり目立ちません。私は文通を、とりわけ彼の実践的で形式的で演出上の観点を伴った社会的活動の表現として考察したいのです。彼の書簡の伝承状態がこの考察を行う際の不動の拠り所となります。もっとも、この拠り所には可能性だけでなく問題点も含まれているのですが。

\*\*\*

## いくつかの問い

文通は、大抵は遠方の人々との書簡の交換とみなされています<sup>38)</sup>。どの場合でも、文通は、他の多くのタイプのテキストとは異なり、対面を前提し、このことでもって関係を樹立します。書簡が受取人に宛てられる際に、差出人は返事を期待しているか、少なくとも書簡で言及されていることを聞き入れてもらうことを望んでいます。(例えば、書簡のレトリックや文通の承諾と続行の手続きにおいて) 言語的な形式、およびその背後にある社会的実践は規範に従っています<sup>39)</sup>。こうした全てのことに對し、ライプニッツの書簡という資料は多くの実例を含むわかりやすい教材を提供します。——それはまだ到底十分に調査されてはいないのですが。そのための前提は、この万学者を社会的・文化的な脈落の中でとらえるこ

とであり、——またその際にすでに流布している彼のいくつかの特徴の背景を探ることでしょう。

## 1. 文通の体系的構築

ライブニッツは自らの文通を体系的に構築したと私が言った場合、このことは、豊富な事例でもって立証することができます。しかし、ライブニッツが体系的に文通を構築した頻度は同時代人と比べるとそれほど高くありません。(突発的な用件を伝えるやりとりを除き) 文通は、常に体系的に構築されなくてはなりません。まず、ある二人が文通関係を結ぶ前に、(対称的であれ、非対称的であれ) 彼らの背後にある社会的関係が定義されます。この社会的関係は、文通活動そのものによるものと比べると明確ではありません。(学者の共和国では書簡のレトリックが社会的関係の非対称性を覆い隠すのです)<sup>40)</sup>。(直接書簡においてであれ、仲介者を介してであれ) 文通を承諾して欲しいという願いを表明した者は、この願いが実現しないことも勘定に入れなくてはなりません。ピエール・ブルデューによって示された交換文化という考え方に基づく書簡の考察手法を——交換文化において、書簡は贈与と返礼となりますが——ハイコ・ドローステが数年前に外交上の書簡に適用しました<sup>41)</sup>。同様に、我々はこの手法をライブニッツの書簡にも転用できます。彼の書簡に常に返礼が続いたわけではないこと、彼の文通の願い出が常に聞き入れられたわけではないことについて、我々は多くの事例を持っています。——その最も重要な事例はトマス・ホプズとジョン・ロックです<sup>42)</sup>。他方で、前に引用したエックハルトの証言もあります。この証言によれば、ライブニッツは、彼に書簡を宛てた全ての人に分け隔てなく常に返答し(このことで当時としては異例の対応をし) たというのです。このことは、実際立証することができます。しかし、文通を行っている最中に彼がもはや返答しなかったことも我々は確証できます。——それは、書簡の差出人に対する非言語的な合図だったのかもしれませんが<sup>43)</sup>。もちろん、情報交換のための「迂回」もあります。つまり、非直接的な文通です。この場合、仲介者が、文通活動によって直接は結び付けられていない二人の間で情報を転送することを引き受けます。——このことは、例えば、ライブニッツが歴史家マビヨンと情報交換した際にたびたび見られます<sup>44)</sup>。反対に、彼はこのやり方で選帝侯妃ゾフィーのために、イギリスの彼女の支持者といくらかの文通を行ったのです<sup>45)</sup>。

## 2. ネット、ネットワーク、あるいは諸ネットワーク？

近世初期の書簡作品における人間関係を特徴づけるために文通ネットワークが好んで話題にされます。しかし、ネットワーク研究が進むにつれて、この概念は様々な場面で使われるようになりました。「どの文通もあるネットワークの同一の部分ではない」(マリアン・フェッセル)<sup>46)</sup>。とはいえ、この用語の一般的な用法はすでに確立されています。つまり、専門



用語として使われた場合、ネットワークとはその成員間の相互関係を意味するのです。ネットワーク研究のために中心的な役割が与えられるのは、出所を適切に把握できる書簡によるコミュニケーションです。したがって、厳密に言えば、ここでネットワークと解されるべきなのは、ライプニッツだけではなく、他の人々とも相互に関係を持っていた文通相手のグループのみでしょう<sup>47)</sup>。そして、文通関係全体を指すためには、むしろ文通者ネットという表現を使うべきです。

そのような考察において、ある一つのネットは、多くの諸ネットワークへと（そしてまた、豊富ならざる書簡へと）分化していきます。常にこの標語の下に行われたわけではないとはいえ（例えば、ホフマンの『パリにおけるライプニッツ』<sup>48)</sup> やロビネの『イタリア旅行』<sup>49)</sup> によって）、ネットワークの研究は本来ずっと前から進められています。多くの下位のネットワークの中には、比較的長い間存続したものがあります。（例えば、イエズス会の中国宣教師との文通<sup>50)</sup> やベルヌイ兄弟の周りの数学者の集団との計算機の宣伝に関する文通、ベルリン学術アカデミー周辺における難民との文通がそうです）。また他方で、比較的短い期間で消滅してしまったネットワークもあります。（例えば、改暦に関連する天文学者との書簡）。イタリア・ライプニッツ協会のヴォルフエンビュッテルでのワークショップで数か月前にこの研究の事例と端緒が扱われました<sup>51)</sup>。この点についても、さらにきわめて多くの研究が行われるべきです。しかし、私がご紹介したいのは、1690年代のライプニッツの文通におけるロシア論考に関するクリスティーネ・ロルの模範的研究です<sup>52)</sup>。この研究は、あるテーマに関するあるネットワークが段階的に構築される過程を示しています。つまり、まず個々の文通関係においてネットワークが構築された後、そこからの情報が他の文通相手にどのように転送され、最終的に彼らが互いにどのように意志疎通するのかを示しているのです。

### 3. 文通相手とは何か？

ライプニッツの文通が量的に膨大な規模であったことは、彼に関する基礎知識の一つです。このことが立証されるのは、アカデミー版付属のデータベース（[www.leibniz-edition.de](http://www.leibniz-edition.de), link Hilfsmittel）、作業目録、ならびに構築中の人物・文通データベースにおいてです。最新の編集状況を反映しているこのデータベースには、現在1175名の文通相手と15461通の書簡が記載されています<sup>53)</sup>。この数は、編集作業が進むにつれてさらに増大しています。それでも行き過ぎた批判だと非難される危険を犯して、次のように問います。文通者目録に記載されている全ての人は本当に文通相手だったのか、と。この点について、一つ引用を挙げます。「書簡の執筆から文通の確立までのステップは強制的なものではない」（エドウィン・ファン・メールケルクがホイヘンスの文通との関連でこのように述べています）<sup>54)</sup>。この主張は、ライプニッツにも転用できます。それもまさに格別により伝承状態のゆえにです。

ライプニッツの書簡はきわめて厄介な経緯を経て伝承されています。多くの近世初期の学者達において、伝承された書簡作品は、書簡を執筆するという文化的活動の物質的な残余であるのみならず、この活動の意図をも反映しているのです。学者の共和国では、所属は特に文通によって定義されます<sup>55)</sup>。他の市民との書簡のやり取りはこの共和国に属していることを意味し、社会的な問題です。つまり、書簡のやり取りは、討論の場であり、情報のプールであり、ステータスシンボルなのです。(もちろん、その中に著名人がいる場合には特にそうです)<sup>56)</sup>。固有の文通関係に関する資料は、自叙伝的な様式化の契機を含んでいます。(同様のことは学者の蔵書にも当てはまります)。学者達は自らの文通を作品集とともに出版してもらい、自らの書簡作品の写し、あるいは文通者リストを添えたのです。これは、死後も彼らのことが人々の記憶に残ることを視野に入れてのことです<sup>57)</sup>。しかしライプニッツは違いました。我々が彼の文通を作品集の一部とみなす場合、このことは、彼自身が書簡に与えた役割と一致します。——しかし、それは同時代の人々を念頭においたものであって、後世の人々に関してではありません。後世の人々のことを彼が視野に入れていなかったことは明らかです。ライプニッツは、彼の作品集の後世への影響力をほとんど配慮していなかったのです。

自らの書簡の選別(とそれに基づく格付け)をしなかったという点でも、彼には後世の人々への配慮が欠けていました。彼の遺作は編集を経ずに我々の下にやってきました。すでに 18 世紀の後半に、ある伝記作家が次のように推定していました。「卒中発作で突然死しなかったとすれば、ライプニッツは彼の文書類の中でもきわめて出来の悪いものを全て火の中に投げこんでいたでしょう。これらの文書類は、吟味にさらず時間が欠けていたためか、単なる偶然によって残存したのです」<sup>58)</sup>。もちろん、そうならなかったことに今日我々は感謝しています。その代わりに、書簡作品があまり構造化されていないように見えること、そして——きわめて恵まれた——伝承状態がこの作品の性格を強く決定しているように見えることを、我々は甘んじて受け入れます。しかし、このことは以下のことを意味します。それは、我々がきわめて多くの文通相手と書簡を考察対象としなくてはならないのは、ライプニッツが他の近世初期の学者とは異なり自らの書簡の選別を行わなかった結果でもあるということです。

別の観点からも、ライプニッツは書簡作品を自らの生きた証として後世に遺す気はなかったと言えます。自身の人生における文通の意味を強調する場合、大抵ライプニッツは一般的に定式化するだけにとどめ、文通相手の名を挙げることはありません。ただ時折、彼が交渉を持っていた人々の目録が見つかります<sup>59)</sup>。しかし、これはきわめて部分的なものです。それゆえ、ライプニッツは自らの文通相手の正当な目録は遺さなかった、と言わざるをえません。確かに、伝承されたものにおいて、彼自身の書簡は時折選別されていたという印象を受けます。模写や抜書が(宮廷や学者の世界における)文通相手や個々の書簡の意義とともに

に、増えていくのです。しかし、文通相手の書簡においては、全てを見出すことができます。ヨーロッパの領主の宮廷の構成員から職人、請願者、犯罪人に至るまで、定評のある学者から学術的な接触の構築の初期状態にある学生、挫折者に至るまで全てです。

このことによって、ライプニッツの郵便物の中には、学者の文通と当時特徴づけられていたものよりも、きわめて多くのものが我々に伝承されています。もちろん、これらの郵便物を我々はすでに手にしています。彼の文通相手のリストにおいて、当時の学者の世界の「名士達」が潜んでいるのを直接見るができるでしょう。しかし、これらの「偉大な」文通<sup>60)</sup>（これには宮廷の文通も含まれるのですが）の他に、おそらく当時の書簡収集へと決して取り入れられなかったはずの多くの文通があります<sup>61)</sup>。彼の文通に関するイメージは、このことによって、より多彩かつ多様で、現実に一層近いものに、——そしてある仕方ではより平凡にもなります。

このことは我々をいらだたせました。直近の後世、初期の編集作業の流れにそって、ライプニッツの書簡が彼の支持者の手にわたった時、いくらかの書簡は、その内容のために処分され（その結果失われ）てしまいました<sup>62)</sup>。これらの書簡は、学術的なテーマではなく、金銭や他の日常的な事柄に関するものだったからです。確かに、1920年頃、アカデミー版の編集方針が定式化された時に、ライプニッツによって書かれたものは全て編集に値すると宣言されました。——しかし、文通相手の書簡は必ずしもそうではなかったのです<sup>63)</sup>。20世紀後半においてもなお、ザクセンにおいてライプニッツを高く評価した歴史家ゲオルク・シュナートが文通相手の書簡の再現を大幅に削減することに賛成しました。文通の持つその本来の核（ここでは特に哲学や数学に関する討論や偉大な宮廷の文通を指していますが）をよりはっきりと際立たせるためには、余計なものに押しつぶされることから解放されなくてはならないというのです<sup>64)</sup>。ここでの余計なものとは、「三流四流の文通相手の書簡」と重要でない内容を持つように見える書簡のことです<sup>65)</sup>。シュナートは報告の転送を含む書簡が冗長なことにもクレームをつけました。特に、『一般・政治・歴史書簡』（第I系列）で提示されている資料について、シュナートは厳しい判断を下しています。その中のわずかな文通だけが、全面的に印刷されるに値するというのです。数十年にもわたって彼の私見として伝えられた対案は、そのような冗長な書簡は本来短縮版でのみ（つまりカットされた部分がある状態で）再現されるべきだというものです。この方針をシュナートは貫徹できませんでした<sup>66)</sup>。そのうち、アカデミー版は全ての文通相手の書簡を、どんなに些細で無意味に見えるようなものさえ、全面的に印刷するようになります。このことで、アカデミー版は、作品集との関係に加え、ライプニッツの生きた時代全般のための一次資料となりました。つまり、アカデミー版は学問史の中心道路、偉大な立役者や企てのみならず、その「判別の難しい」側面をも明らかにするための基盤となったのです。ここでの「判別の難しい」側面とは、裏通り、袋小路、背景にある形、補佐者、挫折者、実現に至らなかった計画、未印刷のまま

の著作<sup>67)</sup>、一言で言えば実験室のことです。こうした実験室を映し出す鏡が学者の共和国なのです<sup>68)</sup>。

したがって、ここで文通が無選別に目の前にある素材に基づいてのみ定義される場合、書簡のやり取りの様式的なイメージを超えて、実際誰と書簡のやり取りが行われたかのイメージを得る可能性が開かれます。——そして、この点について驚かれるかもしれません。いずれにせよ、ライブニッツと彼の書簡に特徴的なのは、すでに確立された学術的討論を超えて実践的知識にも目が向けられていることです。ライブニッツはどの地位や職業の人にも偏見なく接した、という前に引用した同僚エックハルトの証言は、(この偏見のなさは彼の学問理解にも一致しているのですが)、かくも多くの書簡が保存された原因の説明でありうるでしょう。

もちろん、我々は限界事例があることを認めざるをえません。リンツ出身の助産婦<sup>69)</sup>やハノーファー出身の床屋<sup>70)</sup>の場合です。ライブニッツに宛てられた彼らの短い書簡は、同僚の一人の実践的な事柄を片付けることにのみ向けられており、——ライブニッツには間接的にしか関係ありません。ライブニッツとの書簡の交換を意図していなかったこの二人は、文通相手と言えるのでしょうか？ 少なくとも彼らは文通者目録には記載されていますし、二つの名前をもってこの目録に寄与しています。したがって、我々は周辺分野も考慮に入れなくてはなりません。我々の文通者目録に記載されている全ての人々をライブニッツが彼自身の目録に収録しなかっただろうということは、早期の証言、つまり1677年に彼が一度だけ自らの文通の見取り図を描いた時の証言が示しています<sup>71)</sup>。アカデミー版においてこの時期のものとして記録されている文通相手と比較すると、それらは明らかに不一致をきたしています。

#### 4. 「偉大な」文通相手と「無名の」文通相手？

したがって、伝承された資料だけでは、それがかくも内容豊富であるがゆえに、むしろライブニッツの文通に関して具体的かつレッテル張りを超えた言明を行うことを難しくするように思えます。我々は他の方法で接近してみましょう。つまり、量的分析を介してです。

ライブニッツの書簡作品は、構造的に見てもきわめて多様です。彼の書簡は、数行の文章から大量の頁に及ぶものまで、また1通のみの書簡からおよそ500通に及ぶ文通に至るまで、短期的な文通関係から40年を超える文通関係に至るまで、実に様々です。40人以上(およそ3%)の文通相手からは、各々少なくとも100通の書簡が伝承されています。全ての書簡のおよそ40~50%は彼らの書簡に由来しているのです。

前に言及したリンツの助産婦とハノーファーの床屋のような1通の書簡、短い期間だけ続いた文通全般は、ここでは多数派です。これらの散発的な文通の多くは、その生活ぶりがライブニッツにはあまり知られていない人達と交わされたものです。彼らは、ごく短い期間だ

け目の前の案件を達成するために(それは、しばしば仲裁の依頼なのですが)、ライプニッツに接触を試みていたのです。しかし、散発的な書簡は文通にとって重要ではないという(容易に思いつく)結論は納得がいくものではありません。ライプニッツ自身がしたためた書簡も応答がないままのこともあります<sup>72)</sup>。たとえライプニッツにとって彼の文通の一部とみなされていたとしても、彼の人生の最終年に書かれたいくつかの書簡は、ただ彼の予期せぬ死のためにのみ、散発的になってしまったのでしょう。(例えば見聞の広い若き医師ヨハン・フィリップ・ザイプの場合がそうです。ライプニッツは、彼の人生の最後の年にザイプとピルモントで長時間の対話を行ないました。その後、ザイプはライプニッツの臨終に際して尽力したのです<sup>73)</sup>。多くの人々の記憶におそらく最も強く刻まれている文通の一つ、つまりアイザック・ニュートンとの文通はごくわずかなものでした<sup>74)</sup>。

もう一方の極、つまり書簡の数が多い文通においても、多彩なイメージが明らかになります。そこから少なくとも100通の書簡が伝承されている文通<sup>75)</sup>の中には、学術界の著名人(例えば、ヨハン・ベルヌイ、デ・ボス、ファルデッラ、マリアベーキ、メンケ、ムラトリー、パパン、ヴォルフ)や宮廷の著名人(ハノーファーからは選帝侯妃ゾフィーとヨハン・フリードリヒ公、ヴォルフェンビュッテルからはアントン・ウルリッヒ公)が見いだされます。しかし、特に「二列目」に属する人々、つまり宮廷関係者がいます<sup>76)</sup>。すなわち、ライプニッツの同僚と他の助手達、二人の親戚です。さらに、頂点において群を抜いたところに、1人の職員、長年の補佐役であったヨハン・フリードリヒ・ホーダンがいます。およそ500通の書簡と誓約書を伴ってです。

つまり、書簡の頻度は、学術的な書簡の交換に関して期待通りのイメージを提供してくれるわけではありません。大規模な文通が必ずしも「偉大な」文通に数え入れられるわけではないですし、散発的な文通が必ずしも「重要でない」文通に数え入れられるわけでもないのです<sup>77)</sup>。この状態にあるのは、ライプニッツだけではありません。クリスティアン・ホイヘンスに関して、彼の大規模な文通が他の学者とではなく、彼の家族と行われていたことが判明したのです<sup>78)</sup>。

## 5. 「世界に対する窓」としての文通

書簡の頻度は、それだけではライプニッツの学術的コミュニケーションにとっての文通の重要性については何も言明しないとしても、その背後にある関係の安定性の指標ではありえます。ネットワーク研究がこの場合に話題にするのが、「強い紐帯」あるいは「弱い紐帯」です<sup>79)</sup>。もちろん、この紐帯に関する研究は不確実さを伴います。ライプニッツの書簡の伝承状態はきわめて良好ではありますが、完全無欠ではないからです。ホーダンと頂点のグループからの他の多くの人々が我々の「ランキング」においてこの位置を占めているのは、彼らの書簡が十分体系的に伝承されているおかげでもあります<sup>80)</sup>。それでも、少なくとも



100 通の書簡は相当の数であり、そこから慎重な結論が導き出されることは許容されるべきでしょう。

ここで、通常のイメージからかけ離れた結果が生じます。我々はライプニッツを狭いハノーファーにおいて文通を「世界に対する窓」として役立てた人と見ています<sup>81)</sup>。これに対し、我々の「文通相手ランキング」において明らかに優位を占めているのは、大規模な文通の40%以上を伴っているブラウンシュヴァイク＝リューネブルク地帯です。前述のように、これらの中には、ハノーファーとヴォルテンビュッテルにおける諸侯、つまりライプニッツの偉大な支援者と対話相手との往復書簡もあります。彼らは学術的なテーマに関するライプニッツの一般的な解説を評価し、ライプニッツの作品に少なからず寄与しました。しかし、これらの人々の中には、補佐的な人々<sup>82)</sup>、同僚、宮廷の周辺の人々、ブラウンシュヴァイク＝リューネブルクのヘルムシュテット大学の教授達もいます。確かに、彼らは学者としてのライプニッツに書簡を宛てています。しかし、彼らはとりわけライプニッツをパトロンとして必要としているのです<sup>83)</sup>。こうした一連の名前はみな、かつて「重要ではない」という手厳しい判定を受けました。これもまた、未編集の伝承の問題なののでしょうか？ 別の仕方方で理解することもできます。ここに映し出されている「強い紐帯」が示しているのは、ライプニッツが学者かつ宮廷人であったことなのです。

ライプニッツ、この万学者が40年間ハノーファー宮廷のために（その前はマインツ選帝侯のために）働いていたことは、彼に関する基礎知識の一つです。本来、このことは自明のことです。しかし、通常のイメージでは、宮廷の世界と学者の世界は対立しています。つまり、宮廷での仕事はライプニッツに自身の作品集のためにきわめてわずかな時間しか残さず、このことでもって彼の作品集の完結を妨げたというのです<sup>84)</sup>。多くの学術的な取り組み（特に文通）を行っていたのは、彼が自らの職務上の課題を正当に評価していなかったためだろうというのです<sup>85)</sup>。この対立は、宮廷と学者の関係が再検討されることで次第に疑問視されるようになります。この再検討の成果はライプニッツだけにかかわるものではありません。宮廷は——学者全般にとって——最高の可能性を秘めた場所になり、宮廷に近い人々は宮廷とは縁遠い人にとって有用な資源となるのです<sup>86)</sup>。

こうした宮廷と学者の関係がまさにライプニッツの文通において見いだされます。彼の文通はブラウンシュヴァイク・リューネブルクにおいて重点的に行われており、学術的な文通の枠をはるかに越え出ています。他方、彼の文通は、彼が学者の世界と宮廷の世界との間を揺れ動いていたこと、この二つの世界が相互に関係していること、学者が二重の役割を持っていたことを反映しています。学者は自らの宮廷での地位を利用して、学者達や他の者達のためにパトロンとして働くことができます。またそれとは反対に、学術的な交渉やそこから得られた情報を学術的な対話相手や情報提供者という自身の非公式的な職務に役立てることもできるのです。この目的のための文通の意義をライプニッツ自身が言葉にしています。

1677年初頭にまさにハノーファーに到着した際に、自らの領主の臣下に自らの資質を示す時に、彼は新たな情報を迅速かつ包括的に入手するための「知識、文通、好奇心」に格別の重きを置いています<sup>87)</sup>。文通は宮廷での仕事を行なうための社会的資産なのです。最後に、ライプニッツが自らの学術的な書簡によるつながりを政治的な報告を偽装して伝達するために使用していることは注目されるべきです<sup>88)</sup>。

## 6. 「汝が与えんがために我与う」——対称と非対称

学者の共和国の標語に数え入れられているのは、寛容さとコミュニケーションです<sup>89)</sup>。この標語は、綱領的に定式化されており、多くの書簡が報告で満たされていることにも反映されています。ライプニッツの書簡においてもそうです。討論や戦略を指向した書簡の他に、きわめて多くの書簡を報告を指向した書簡と特徴づけることができます<sup>90)</sup>。書籍市場、学術的プロジェクトと論争、ある学者の生活に関する幸運な事件と不幸な事件、発見と開発、技術と医術に関する革新、旅行者と彼らの報告、政治における出来事に関する「新しい学術」はほぼ全ての書簡に見いだされます。しかし、かなりの数の書簡は「新しい学術」によって圧倒され、ほぼ学術的報告のみで構成されています。これらの書簡はかなりの数に上りますが、ごく短いものです。そして、これらの書簡ではすぐさま話題転換が行われます。きわめて頻繁に、これらの報告は一回現れるだけではなく、ある文通相手から別の文通相手へと転送されます。

ライプニッツはこの点でも唯一の事例ではありません。学者の共和国は総じて「新しい学術」によって生きているのです。その不文律の一つは、サスキア・ステージェマンが確定したように、情報の取り扱いにおける「汝が与えんがために我与う」というものです<sup>91)</sup>。報告の受領を希望する者は、何らかの情報を提供しなくてはなりません。——数多くの書簡が報告で満ちている理由の一つです。報告は交換の対象であり、情報をコントロールできることは一つの資源です。

よい伝承状態のおかげで、ある情報の道筋を多くの停留所を介して追跡することができます。そして、(再び伝承に関しては留保しつつ)、いかにライプニッツが彼の下に届いた報告を取り扱っていたかも見極められます<sup>92)</sup>。つまり、彼は報告を単に広めただけでなく、むしろ選択的かつ戦略的に使用していたのです<sup>93)</sup>。情報を提供される人々(のグループ)もあれば、何の利益もないまま終わる人々(のグループ)もあります。例えば、技術的な革新に関する報告をある学者から受け取った場合でも、彼は宮廷のために留め置いていました<sup>94)</sup>。これに対し、本来の意味での「新しい学術」は広範に広められました。学者の世界においても、報告を広めることが目指されていました。その背後には部分的なコミュニケーション空間が広がっています。このコミュニケーション空間の研究はまだ始まったばかりです。しかし、ここで私は「書簡の共和国の再構築」というプロジェクトをご紹介します。

いと思います。このプロジェクトは、ハワード・ホットソン（オックスフォード）とトーマス・ヴァルニヒ（ウィーン）主導で学者の共和国の詳細な構造を探索しますが、——その際対象としているのは大規模な報告の交換なのです<sup>95)</sup>。

さらに、ライブニッツにおいては報告の相互提供に関してだけでなく、一方的な情報提供の例も数多くあります。交換文化という考え方が再び役立つかもしれません。前に引用したハイコ・ドローステのスウェーデン宮廷の周辺におけるパトロン関係に関する研究において、そのような非対称的な関係の下での一方的な書簡による情報提供は、顧客への「贈与」として表現されています。その「返礼」として、パトロンの持つ資源への関与、つまり宮廷における仲介や取り成しが期待されているのです<sup>96)</sup>。この研究成果は部分的に（常に伝承に関しては留保しつつ）ライブニッツの書簡作品にも転用することができますし、さらに彼の明確な供述によって裏付けられます<sup>97)</sup>。実際、（保証された）文通の推移に関する（厳密な）研究が示したのは、宮廷関係者との仲介をライブニッツに依頼するための文通においては、しばしば情報の提供と文通の経過が一方的であることです。——その背後には非対称的な関係が認められます。これとは反対の場合もあります。——例えば選帝侯妃ゾフィーとの大規模な文通においてはライブニッツ自身の書簡が優位を占めています。にもかかわらず、これらの書簡には、ライブニッツにとって利益にはならないことが多く記されているのです<sup>98)</sup>。

サスキア・ステージェマンによって探求されたさらなる現象、つまり学術的なえこひいきも書簡に反映されています<sup>99)</sup>。学者の共和国は、自称するところでは、平等の法則にしたがっています<sup>100)</sup>。しかし実際にはヒエラルキーがあります<sup>101)</sup>。このヒエラルキーの下でさえ、地位の等しさという見かけは（例えば呼称において）保たれています。規範と書簡のレトリックこそが交渉の形式を規定します<sup>102)</sup>。しかしここでも、文通の経過と報告の提供には落差が見られます<sup>103)</sup>。そのような（隠蔽された）非対称的な関係においてライブニッツはよく学者として書簡を受け取っています。——しかし、実際は宮廷人として話しかけられているのです。このことによって、書簡作品が学者の世界において学術討論以外に役割を持つことが明らかになります。そして、書簡作品は様々な領域で社会的活動としての文通活動の事例を提供します。——それは、まさに書簡が学術的な文通にとどまらない仕方で伝承されているからなのです。

\*\*\*

## 結論

以上のことをもって円環が閉じます。我々は伝承状態に驚き、伝承の豊かさ、文通相手とテーマの多さに感嘆したものの、その果てしない周縁と多くの「二列目」からの文通相手を

目にして少し途方に暮れた後に、次第に構造が見えてきます。討論と地位の等しさではなく、情報の仲介と非対称性が背後に潜んでいる、一見重要でないように見えるテーマと文通相手こそが、規範の背後に潜むバロックの書簡文化と学術的コミュニケーションの実情に対する展望を開くのです。——そして、ライプニッツのこれらの取り扱いに関する展望をも開くのです。

ライプニッツ研究にとって、書簡作品が作品集の「不可欠の構成要素」でもあるのには適切な理由があります。しかしそれ以上に、このかくも豊富な伝承はライプニッツに関係しない学問史、近世初期ヨーロッパ研究、特に学者の共和国に関する研究に、規範と理想的な自己描写を超えた「実態」に関する展望を切り拓くのです。もちろん、私はここで問いを立て、可能な探求の端緒を描き出すことで満足しなければなりませんでした。主要な仕事はまだ我々の前にあります。

#### (文献表)

##### [一次文献]

A = [アカデミー版] Gottfried Wilhelm Leibniz (1923ff.). *Sämtliche Schriften und Briefe*. Hrsg. von der Preußischen [später: Deutschen, zuletzt: Berlin-Brandenburgischen] Akademie der Wissenschaften und der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen. (Darmstadt [später: Leipzig, zuletzt Berlin])

引用の仕方: A [系列], [巻], N. [長編の場合は、さらに頁].

Babin/Widmaier (2006) = *Gottfried Wilhelm Leibniz: Der Briefwechsel mit den Jesuiten in China (1689–1714)*. Herausgegeben und mit einer Einleitung versehen von Rita Widmaier, Textherstellung und Übersetzung von Malte-Ludolf Babin. Hamburg 2006.

Babin/Widmaier (2017) = *Gottfried Wilhelm Leibniz: Briefe über China (1694–1716): die Korrespondenz mit Barthélemy des Bosses S. J. und anderen Mitgliedern des Ordens*. Herausgegeben und kommentiert von Rita Widmaier und Malte-Ludolf Babin, Textauswahl und Einleitung von Rita Widmaier, Textherstellung und Übersetzung von Malte-Ludolf Babin. Hamburg 2017.

Eckhart (1779) = Johann Georg von Eckhart: *Lebensbeschreibung des Freyherrn von Leibnitz* [1779]. Nachdruck in: *Leibniz-Biographien*, S. 123–203.

Leibniz-Biographien = *Leibniz-Biographien*. Hildesheim [et al.] 2003.

Leibniz/Sophie (2017) = *Gottfried Wilhelm Leibniz – Kurfürstin Sophie von Hannover. Briefwechsel*. Hrsg. von Wenchao Li. Aus dem Französischen von Gerda Utermöhlen und Sabine Sellschopp. Göttingen 2017.

##### [文献目録]

Ravier (1937) = Emile Ravier: *Bibliographie des œuvres de Leibniz*. Paris 1937.

Leibniz-Bibliographie online: [www.leibniz-bibliographie.de](http://www.leibniz-bibliographie.de)

##### [データベースとポータルサイト]

Arbeitskatalog der Leibniz-Edition: <http://mdb.lsp.uni-hannover.de>

Kumuliertes Korrespondenzverzeichnis der Leibniz-Edition  
www.gwlb.de/Leibniz/Leibnizarchiv/Veroeffentlichungen/Korrespondentendatenbank  
Personen- und Korrespondenz-Datenbank der Leibniz-Edition  
<https://leibniz.uni-goettingen.de>

[二次文献]

- Beeley (2004) = Philip Beeley: A Philosophical Apprenticeship: Leibniz's Correspondence with the Secretary of the Royal Society, Henry Oldenburg. In: Lodge (2004), S. 47–73.
- Berkvens-Stevelinck/Bots/Häseler (2005) = Christiane Berkvens-Stevelinck/Hans Bots/Jens Häseler (Hrsg.): *Les grands intermédiaires culturels de la république des lettres. Études de réseaux de correspondances du XVI<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècles*. Paris 2005.
- Bots (2005) = Hans Bots: Introduction: Communication et instruments d'échanges dans la République des Lettres. In: Berkvens-Stevelinck/Bots/Häseler (2005), S. 9–24.
- Bots/Waquet (1994) = Hans Bots/Françoise Waquet (Hrsg.): *Commercium litterarium. La communication dans la république des lettres 1650–1750*. Amsterdam 1994, S. 301–319.
- Bots/Waquet (1997) = Hans Bots/Françoise Waquet: *La République des Lettres*. Paris 1997.
- Dascal (2006) = Marcelo Dascal: *G. W. Leibniz: The Art of Controversies*. Dordrecht 2006.
- Dibon (1976) = Paul Dibon: Les échanges épistolaires dans l'Europe savante du XVII<sup>e</sup> siècle. In: *Les Correspondances. Leur importance pour l'historien des Sciences de la Philosophie. Problèmes de leur édition*. Journées organisées par le Centre International de Synthèse le 5, 6, et 7 mai à Chantilly (Revue de synthèse XCVII, 1976), S. 31–50.
- Döring (1999) = Detlev Döring: *Die Philosophie Gottfried Wilhelm Leibniz' und die Leipziger Aufklärung in der ersten Hälfte des 18. Jahrhunderts*. Stuttgart u. Leipzig 1999.
- Droste (2006) = Heiko Droste: *Im Dienste der Krone. Schwedische Diplomaten im 17. Jahrhundert*. Berlin 2006.
- Dülmen (2002) = Richard van Dülmen: Gespräche, Korrespondenzen, Sozietäten. Leibniz' dialogische Philosophie. In: Richard van Dülmen/Sina Rauschenbach (Hrsg.): *Denkwelten um 1700. Zehn intellektuelle Profile*. Köln [et al.], S. 123–140.
- Füssel (2015) = Marian Füssel: Einleitung. In: Marian Füssel/Martin Mulsow (Hrsg.): *Gelehrtenrepublik (Aufklärung. Interdisziplinäres Jahrbuch zur Erforschung des 18. Jahrhunderts und seiner Wirkungsgeschichte, 26, 2015)*. S. 5–16.
- Gädeke (2005) = Nora Gädeke: Gottfried Wilhelm Leibniz. In: Berkvens-Stevelinck/Bots/Häseler (2005), S. 257–306.
- Gädeke (2009) = Nora Gädeke: Leibniz lässt sich informieren — Asymmetrien in seinen Korrespondenzbeziehungen. In: Herbst/Kratochwil (2009), S. 25–46.
- Gädeke (2011) = Nora Gädeke: Leibniz' Korrespondenz mit Professoren der Universität Helmstedt. In: Herbert Breger/Jürgen Herbst/Sven Erdner (Hrsg.): *Natur und Subjekt. IX. Internationaler Leibniz-Kongress*. Vorträge. Bd. 1. Hannover 2011, S. 368–377.
- Gädeke (2012) = Nora Gädeke: Das Korrespondenzverzeichnis der Akademie-Ausgabe — Hilfsmittel oder Forschungsinstrument? In: Li (2012), S. 81–93.
- Gädeke (2016. 1) = Nora Gädeke: Leibniz' Korrespondenz im letzten Lebensjahr — Gerber reconsidered. In: Michael Kempe (Hrsg.): *1716 — Leibniz' letztes Lebensjahr. Unbekanntes zu einem bekannten*



- Universalgenie*. Hannover 2016, S. 83–109.
- Gädeke (2016. 2) = Nora Gädeke: Au-delà de la philosophie. L'édition de la correspondance générale, politique et historique de Leibniz. In: Michel Fichant/Arnaud Pelletier (Hrsg.): *Leibniz après 1716: comment (ne pas) être leibnizien*. (*Les Études Philosophiques* 2016. 4), S. 577–595.
- Gädeke (2017. 1) = Nora Gädeke: Edition im Netzwerk — Christian Kortholts Godefridi Guil. Leibnitii Epistolae ad diversos und die Sammlung seines Vaters Sebastian Kortholt. In: Gädeke/Li (2017), S. 135–162.
- Gädeke (2017. 2) = Nora Gädeke: Praxis und Theorie. Ein Blick in die Werkstatt des Historikers Leibniz. In: *Gottfried Wilhelm Leibniz (1647–1716). Akademievorlesungen Februar – März 2016* (Hamburger Akademie Vorträge 1). Hamburg 2017, S. 43–84.
- Gädeke/Li (2017) = Nora Gädeke/Wenchao Li (Hrsg.): *Leibniz in Latenz. Überlieferungsbildung als Rezeption (1716–1740)* (Studia Leibnitiana Sonderhefte 50). Stuttgart 2017.
- Gerber (1966) = Georg Gerber: Leibniz und seine Korrespondenz. In: Totok/Haase (1966), S. 141–171.
- Gierl (2004) = Martin Gierl: Korrespondenzen, Disputationen, Zeitschriften. Wissensorganisation und die Entwicklung der gelehrten Medienrepublik zwischen 1670 und 1730. In: Richard van Dülmen/Sina Rauschenbach (Hrsg.): *Macht des Wissens. Die Entstehung der modernen Wissensgesellschaft*. Köln [et al.] 2004, S. 417–438.
- Gierl (2009) = Martin Gierl: Res publica litteraria — Kommunikation, Institution, Information, Organisation und Takt. [et al.]. In: Herbst/Kratochwil (2009), S. 241–252.
- Goldgar (1995) = Anne Goldgar: *Impolite Learning. Conduct and Community in the Republic of Letters 1680–1750*. New Haven und London 1995.
- Heesakkers (2005) = Chris L. Heesakkers: Erasmus Epistolographus, in: Berkevans-Stevelinck/Bots/Häsel (2005), S. 29–60.
- Herbst/Kratochwil (2009) = Klaus-Dieter Herbst/Stefan Kratochwil (Hrsg.): *Kommunikation in der Frühen Neuzeit*. Frankfurt am Main [et al.] 2009.
- Hofmann (1974) = Joseph E. Hofmann: *Leibniz in Paris 1672–1676 — his growth to mathematical maturity*. Cambridge 1974.
- Kliege-Biller (2012) = Herma Kliege-Biller (2012). Neuigkeiten — Netzwerke — Nachlässe: Claude Nicaise und Leibniz. In: Li (2012), S. 301–314.
- Kliege-Biller/Meier-Oeser/Waldhoff (2016) = Herma Kliege-Biller/Stephan Meier-Oeser/Stephan Waldhoff: Einen barocken Universalgelehrten edieren: Gottfried Wilhelm Leibniz, Sämtliche Schriften und Briefe. In: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 64 (2016), S. 951–977.
- Kratochwil (2009) = Stefan Kratochwil: Der Briefwechsel von Erhard Weigel. In: Herbst/Kratochwil (2009), S. 135–154.
- Kühn (2011) = Sebastian Kühn: *Wissen, Arbeit und Freundschaft. Ökonomien und soziale Beziehungen an den Akademien in London, Paris und Berlin um 1700*. Göttingen 2011.
- Kühn (2016) = Sebastian Kühn: Streiten zu dritt. Über agonale Praktiken des Korrespondierens mit und ohne Leibniz. In: Wenchao Li [et al.] (Hrsg.): *Für unser Glück oder das Glück anderer. Vorträge des X. Internationalen Leibniz-Kongresses*, Bd. 5, Hildesheim [et al.] 2016, S. 509–521.
- Levine (1994) = James M. Levine: Strive in the republic letters. In: Bots/Waquet (1994), S. 301–319.
- Li (2012) = Wenchao Li (Hrsg.): *Komma und Kathedrale. Tradition, Bedeutung und Herausforderung der*

- Leibniz-Edition*. Berlin 2012.
- Lodge (2004) = Paul Lodge (Hrsg.): *Leibniz and His Correspondents*. Cambridge 2004.
- Meerkerk (2005) = Edwin van Meerkerk: The Correspondence Network of Christiaan Huygens (1629–1695). In: Berkvens-Stevelinck/Bots/Häselar (2005), S. 211–228.
- Mulsow (2012) = Martin Mulsow: *Prekäres Wissen. Eine andere Ideengeschichte der Frühen Neuzeit*. Berlin 2012.
- Ohnsorge (1966) = Werner Ohnsorge: Leibniz als Staatsbediensteter. In: Totok/Haase (1966), S. 173–192.
- Phemister (2004) = Pauline Phemister: „All the time and everywhere everything’s the same as here“. The Principle of Uniformity in the Correspondence Between Leibniz and Lady Masham. In: Lodge (2004), S. 193–213.
- Robinet (1988) = André Robinet: *G. W. Leibniz Iter Italicum (Mars 1689–Mars 1690). La dynamique de la République des Lettres*. Firenze 1988.
- Roll (2015) = Christine Roll: Barbaren? Tabula rasa? Wie Leibniz sein neues Wissen über Russland auf den Begriff brachte. Eine Studie über die Bedeutung der Vernetzung gelehrter Korrespondenzen für die Ermöglichung aufgeklärter Diskurse. In: Friedrich Beiderbeck/Irene Dingel/Wenchao Li (Hrsg.): *Umwelt und Weltgestaltung. Leibniz’ politisches Denken in seiner Zeit*. Göttingen 2015, S. 307–358.
- Schmid (1988) = Irmtraut Schmid: „Was ist ein Brief?“ Zur Begriffsbestimmung des Terminus „Brief“ als Bezeichnung einer quellenkundlichen Gattung. In: *Editio 2*, 1988, S. 1–7.
- Sellschopp (2017) = Sabine Sellschopp: Versprengte Überlieferung von Leibnitiana. Ein Überblick auf der Basis des Arbeitskatalogs der Leibniz-Edition. In: Gädeke/Li (2017), S. 33–46.
- Stegeman (2005) = Saskia Stegeman: *Patronage and Services in the Republic of Letters. The Network of Theodorus Janssonius van Almelooven (1657–1712)*. Amsterdam und Utrecht 2005. [Übersetzung des holländischen Originaltextes von 1996].
- Totok/Haase (1966) = Wilhelm Totok/Carl Haase (Hrsg.): *Leibniz. Sein Leben – sein Wirken – seine Welt*. Hannover 1966.
- Utermöhlen (1977) = Gerda Utermöhlen: Der Briefwechsel des Gottfried Wilhelm Leibniz — die umfangreichste Korrespondenz des 17. Jahrhunderts und der „Républiques des Lettres“. In: Wolfgang Frühwald [et al.] (Hrsg.): *Probleme der Brief-Edition. Kolloquium der Deutschen Forschungsgemeinschaft Schloß Tutzing 8.–11. September 1975*. Bonn 1977, S. 87–103.
- Wahl (2017) = Charlotte Wahl: Zur Provenienz der Gothaer Leibnitiana Chart. A 448–449 und zum umstrittenen Leibnizbrief. In: Gädeke/Li (2017), S. 63–83.
- Waldhoff (2016) = Stephan Waldhoff: „auff ein absonderlich papier“. Eine bürokratische Technik zur Begrenzung von Öffentlichkeit in Leibniz’ Briefwechsel. In: Wenchao Li/Simona Noreik (Hrsg.): *G. W. Leibniz und der Gelehrtenhabitus. Anonymität, Pseudonymität, Camouflage*. Köln [et. al.] 2016, S. 217–263.
- Waldhoff (2017) = Stephan Waldhoff: Das Warschauer Material: Quellen und Rezeptionsspuren. In: Gädeke/Li (2017), S. 85–116.

## 註

- 1) 本稿は 2017 年 11 月 9 日に学習院大学人文科学研究所で行われた同一タイトルの講演の加筆修正版です。そのため、本稿でも講演の文体が保持されています。
- 2) 酒井潔、佐々木能章 (編) 『ライプニッツ著作集 第 II 期』、全 3 巻、工作舎、2015 年～2018

年のことを指す。

- 3) Kliege-Biller/Meier-Oeser/Waldhoff (2016), S.953-956.
- 4) Bots/Waquet (1997), passim. 特に S.18-21.
- 5) Füssel (2015), S.9.
- 6) Dibon (1976), passim.
- 7) Gierl (2004), S.428-438.
- 8) Kühn (2011), S.231-242. それと Kühn (2016) も参照してください。
- 9) そのための事例を提供するのが、ライプニッツの歴史研究においてきわめて重要なマルキ・ド・ルフージュとの文通です。この文通は長年スペイン継承戦争のために中断されていましたが、1706年以降に再開されました。それはちょうど、別のライプニッツの文通相手グライフェンクランツがフランスに隣接しているプファルツ＝ツヴァイブリュッケン公国に配置転換された時です。彼は往復書簡の仲介者として役立っていたのです。このことは、アカデミー版第I系列26巻のグライフェンクランツならびにルフージュの書簡において明らかになります。(ネット公開されている暫定版でアクセス可能です。[www.gwlb.de/Leibniz/Leibnizarchiv/Veroeffentlichungen/I26.pdf](http://www.gwlb.de/Leibniz/Leibnizarchiv/Veroeffentlichungen/I26.pdf) [2017年8月21日版])。グライフェンクランツの仲介者としての役割はすでに1705年には始まっていました。この点については、A I, 24 Einleitung S.XCIVを見てください。
- 10) Levine (1994), S.315.
- 11) この点については Gerber (1966) を見てください。書簡と文通相手の数、ならびに文通の密度に関して彼が提供した情報は、現在、それを上回ると修正されています。この点については、Gädeke (2012), S.86を見てください。およそ1300人、20000通という数は、アカデミー版の編集のさらなる進展において再度修正される可能性もあるでしょう。
- 12) Kliege-Biller/Meier-Oeser/Waldhoff (2016), S.953f.
- 13) 特に、LBr (ライプニッツの書簡)、LH (ライプニッツの手稿) という分類記号の下に、さらに、まばらなものは、MS という分類記号の下に保管されています。ゴットフリード・ヴィルヘルム・ライプニッツ図書館にある手稿類が電子化されていく中で、分類記号 LH の手稿類はすでにネット上で入手可能になりました (<http://digitale-sammlungen.gwlb.de/start/>, Suchbegriff: LH [2018年7月28日にアップロード済み])。分類記号 Lbr の手稿類が続けて公開される予定です。同様に、現地に残されている手稿類の中には、ニーダーザクセン州文書館のハノーファー分館に所蔵されているライプニッツのものもあります。
- 14) Sellschopp (2017), Wahl (2017), Waldhoff (2017).
- 15) 例えば、ライプニッツのイエナでの師エアハルト・ヴァイゲルの場合がそうです。彼がかつて行った大規模な文通はただ「一部分」のみが保存されています。これに関しては、Kratowich (2009), S.138を参照してください。
- 16) Utermöhlen (1977), S.87.
- 17) 1700年9月3日にはそれよりも多くの書簡が書かれています。これらの書簡は、ボシュエ、ファブリキウス、ルキアン、ミュラー、シュミット (A I, 19)、スローン、ウォリス (A III, 8)、フォントネル (II, 3) に宛てられています。この8通の書簡には、正確な日付が特定されていない書簡、あるいはその間に失われてしまった書簡が付け加わるかもしれません。Leibniz-Editionの人物・文通データベースによれば、1700年12月31日には、9通の書簡が書かれています。
- 18) Bots (2005), S.19.

- 19) A I, 24 N. 103. この点に関しては、A I, 24 Einleitung S. XCIV も見てください。
- 20) Dibon (1976), S. 38.
- 21) Waldhoff (2016)、ライプニッツの事例に関しては同書 S. 241–263 を見てください。
- 22) Gädeke (2005), S. 263f. には、ライプニッツ自身の評価と世間の判定におけるライプニッツの文通の意義に関する事例が記されています。
- 23) Gerber (1966), S. 142.
- 24) Gädeke (2016. 1).
- 25) 2017 年に出版されたアカデミー版第 I 系列 25 巻は、1705 年 8 月から 1706 年 4 月までの期間を包括しています。現在作業中のアカデミー版第 I 系列 26 巻と 27 巻は 1706 年 4 月～12 月、ならびに 1707 年 1 月～9 月までの期間を包括しています。同様に作業中のアカデミー版第 II 系列 4 巻と第 III 系列 9 巻は 1707 年のものを含めて、1705 年 9 月まで到達するでしょう。
- 26) この点に関しては、Gädeke (2017. 1), S. 147 および同ページ注 92 の引用を見てください。
- 27) ハノーファーの副首相の役職を求めるライプニッツを前にして、選帝侯妃ゾフィーは彼に、彼女の息子選帝侯ゲオルク・ルートヴィヒがライプニッツの求めを否定したことを伝えていますが、「インドからも文通する代わりに、きわめて厄介な日々の糧に関してあなた方の責任を引き受けるのはあなた方の連れてきた天才である」とは思えない、という理由であったこともです。
- 28) Döring (1999), S. 29f.
- 29) Eckhart (1779), S. 199.
- 30) A I, 19 N. (S. 411).
- 31) A I, 10 N. 391 を参照してください。
- 32) Roll (2015), S. 328f.
- 33) Dascal (2006), S. XX.
- 34) Utermöhlen (1977), S. 90.
- 35) アカデミー版において書簡を取めた巻はテーマ別に、一般・政治・歴史書簡 (第 I 系列)、哲学書簡 (第 II 系列)、数学・自然科学書簡 (第 III 系列) に分類されています。もちろん、この分類はその時々文通相手の書簡全てに関係します。——このことがこのテーマに関する枠組みをしばしば超過してしまうことは織り込み済みです。書簡の主題の全貌は各巻の序論において示されており、その網羅的な概要は総事項索引から得られます。(総事項索引は <https://leibnizedition.de/hilfsmittel;link:KumuliertesSachverzeichnis> (Index rerum) [2018 年 7 月 31 日にアクセス])。
- 36) 例えば、論文集 Lodge (1994) を参照してください。
- 37) これに関しては、論文集 Gädeke/Li (2017) を見てください。
- 38) Schmid (1988), S. 3.
- 39) Stegeman (2005), S. 277–290, S. 305–314 u. passim.
- 40) Stegeman (2005)、特に S. 177–181.
- 41) Droste (2006)、特に S. 34–36 と S. 186–192.
- 42) もちろん、ホップズの場合とロックの場合では事情は異なります。ライプニッツは、ホップズと文通をしようと試み(挫折)しました。その後まもなく、ライプニッツは、この試みがイングランドとのさらなる接触を難しくしていることを自覚したはずで (Beeley [2004], S. 61f.)。そして、彼は自ら手を引いたのです。他方、ライプニッツは、ロックが死ぬまで彼と対話しよ

うと尽力しましたが、彼と文通に至ることはなかったのです (Phemister [2004], passim)。

- 43) 例えば、ゲッティンゲンの学術ギムナジウムの教授、ヨアヒム・マイアーの場合がそうです。広範な文通において (およそ 65 通が伝承されていますが)、彼は、ライプニッツに何度も手紙を送り、ハノーファー宮廷や州教会での推薦人になって欲しいと頼んでいました。これは典型的なパトロン関係です。もっとも、マイアーはここで自らの義務を怠っています。確かに、彼は、法学の論文を書いてほしいというライプニッツの依頼を快諾し (A I, 17 N. 146)、ライプニッツに関連文献を請求しました (vgl. A I, 17 N. 154 および N. 255)。——しかし、この論文が完成することはありませんでした。アカデミー版の I, 18 以降、マイアーの手紙は常に弁解で満ちています。そして、ライプニッツ自身が彼から距離を取ったことが目に見えてわかります。ライプニッツの手紙は、マイアー自身が気付いたように、より少なくなりました (vgl. A. I, 21 N. 179)。再三の返還要求にもかかわらず、貸し出した本さえも返ってこなかった後に、最終的にライプニッツはもはやマイアーではなく、彼の上司ドランスフェルトに警告したのです。(これらの手紙はまもなく A1, 26 と A1, 27 の先行版においてオンライン上に公開される予定です。) マイアー自身との文通は 10 年以上中断されました。ライプニッツが死ぬ数年前になってようやく、彼はマイアーとの文通を再開しました。(彼は本を買うためにマイアーの助けが必要だったからです。)
- 44) 例えば、A I, 19 N. 197 においてです。この書簡は、内容面から見ればマビヨンに向けられています。直接の宛名は仲介者パンソンです。この事実は、マビヨンが多忙だったことから根拠づけられます。
- 45) 例えば、バーネット、ファレソー、ハットンとの文通がそうです。特に、ファレソーとの文通は「三人で」行われています。
- 46) Füssell (2015), S. 9. 同書 10 ページでフュッセルは「ネットワーク概念の特定の用法に対するある種の懐疑」を表明しています。しかし、彼は「個々人を越えた学者文化の構造を可視化すること」は絶対に価値のあることだと付け加えており、例として特にルドヴィック・フレックの思考集団やブルデューの学問場の概念を挙げています。
- 47) もちろんここで研究は伝承の問題に突き当たることもあります。その場合、この研究は、中心的で良い状態で伝承された書簡作品における手紙のつながりに関する言及にのみかわります。つまり、この研究がかかわるのはいわば「氷山の一角」なのです。
- 48) Hoffmann (1974).
- 49) Robinet (1988).
- 50) これに関しては、Babin/Widmaier (2006) と Babin/Widmaier (2017) を参照してください。
- 51) Margherita Palumbo と Enrico Pasini によって編集された会議報告書は、現在印刷中です。
- 52) Roll (2015).
- 53) 2018 年 7 月 25 日時点。
- 54) Meerkerk (2005), S. 213.
- 55) Bots (2005), S. 12–14.
- 56) Goldgar (1995), S. 29f.; Stegeman (2005), S. 278f. u. passim.
- 57) その例としては、ロッテルダムのエラスムスが挙げられます。Heesakkers (2005), S. 39–45、特に S. 44f.
- 58) クリストフ・ゴットリープ・フォン・ムルは Eckhart (1779) の予備報告 (S. 126) において、このように述べています。



- 59) 例えば、I, 17 N. 118 には、ある若い貴族の随伴旅行のために何人かのフランスの文通者の名が枚挙されています。また、Gädeke (2005), S. 264 で挙げられている事例も参照してください。
- 60) Gerber (1966), S. 144f. は (学術界と政治界からの) 文通相手のうちの「約 150 人」の常に影響力のあった人々について話題にしています。
- 61) Gädeke (2016. 2), S. 591f.
- 62) Gädeke (2017. 1), S. 141.
- 63) Gädeke (2016. 2), S. 589.
- 64) アカデミー版第 I 系列 6 巻~11 巻に対する書評において彼はこのように主張しています。この点については、Gädeke (2016. 2), S. 585-591 を参照してください。
- 65) Gädeke (2016. 2), S. 590, Anm. 81 における引用を参照してください。
- 66) もちろん、彼の要求はアカデミー版の編集において消えることのない痕跡を残しました。それは、第 I 系列の第 6 巻から 15 巻において短縮版の書簡やカットされた部分のある書簡がより多く収録されているということです。
- 67) この点に関する手早い見通しはアカデミー版第 I 系列の各巻の序論で見出されます。
- 68) この段落で指摘した学問史の「判別の難しい」側面については Mulsow (2012) において、綱領的には同書 S. 9-26 に記されています。
- 69) A I, 17 N. 108.
- 70) A I, 16 N. 135
- 71) A I, 2 N. 7.
- 72) 例えば、それはトマス・ホブズ、ニコラウス・メルカトル、ロバート・ボイル宛ての書簡です。——あるいはハンプルクの医師マルティン・フォーゲル宛ての書簡もそうです。フォーゲルにライブニッツは 4 通の手紙を宛てましたが、全く返事はありませんでした。ここで私は自分の講演に一つ訂正を付け加えなくてはなりません。講演では、アカデミー版の作業目録の記載に基づいて、日本学者エンゲルベルト・ケンプファー宛ての手紙もこうした返事のなかった手紙の一つだとみなしていました。しかし、その後の研究によって明らかになったのは、この目録に記されていた情報のやりとりは文通によるものというよりは直接会うことで行われていたということです。
- 73) Antognazza, S. 544. この文通の唯一の書簡は、LBr. 895 Bl. 1-2 において伝承されています。
- 74) Gädeke (2013), S. 182.
- 75) Gädeke (2016. 1), S. 108f. にこれらの文通のリストがあります。
- 76) 例えば、ハノーファーのベルンシュトルフ、グイディ、モラヌス、ヴォルフエンビュッテルのヘルテル、ベルリンのヤブロンスキー兄弟などです。
- 77) 内容的に重要なライブニッツの往復書簡の手紙数に関して言えば、例えば、ボシュエ、ハンシュ、ヘルマン、ホイヘンス、マリオット、オルデンバーグ、パーペプロッホ、ショイヒツァー、ゾフィー・シャルロッテ、シュパンハイム、チルンハウスとの往復書簡は、各々 50 通~100 通の手紙が伝承されています。残りの内容的に重要な書簡、例えばアルノー、ブルゲ、ブーヴェ、フシェ、ロピタル、スローン、デ・フォルダー、ガブリエル・ヴァーグナー、ウォリスとの往復書簡については、各々 20~50 通の手紙が残っています。「偉大」ですが、手紙の数がきわめて少ない文通相手の中には、例えば、ゲーリケ、ニュートン、あるいはヴァイゲルとの往復書簡もあります。彼らの往復書簡よりも数通多くの手紙が残っているものとしては、ヤコブ・ベルヌイ、ユエ、ヤコブ・トマジウス、マールブランシュ、コンリングとの往復書簡がありま

- す。
- 78) Meerkerk (2005), S. 222f.
- 79) これらの基準に関しては Gädeke (2016. 1), S. 89 を参照してください。
- 80) このことは例えば、職員であるエックハルトとヴァーグナー、ヘルムシュテットの教授であるファブリキウスとシュミット、ハルトからは数学者ヨハン・ベルヌイに当てはまります。
- 81) 例えば、Utermöhlen (1977), S. 88.
- 82) 例えば、プロソーがそうです。彼はハノーファー総督としてパリにおいて手紙の転送を引き受けただけでなく、パリの学者達との連絡系の役割を果たしました。あるいはヴォルフエンビュッテル図書館の秘書ライナーディンクがそうです。
- 83) Gädeke (2011).
- 84) Gädeke (2017. 2), S. 44f.
- 85) 例えば、Ohnsorge (1966)、特に同書の S. 192.
- 86) Dülmen (2002)、特に S. 133.
- 87) A I, 2 N. 7.
- 88) Gädeke (2013), S. 197f.
- 89) Bots (2005), S. 12–14.
- 90) これに関しては Gädeke (2016. 2), S. 587 を見てください。アカデミー版第 I 系列の多くの巻の序論では、そのつど「新しい学術」に関して一章が費やされています。
- 91) Stegeman (2005), S. 170–173.
- 92) Gädeke (2005), S. 293–295 においてその事例があります。
- 93) Kliege-Biller (2012), S. 209.
- 94) Gädeke (2005), S. 296.
- 95) <http://www.republicofletters.net/>.
- 96) Droste (2006), S. 173–192.
- 97) Gädeke (2009).
- 98) Leibniz/Sophie (2017), S. 789 および S. 792.
- 99) Stegeman (2005)、特に同書の S. 169–201.
- 100) Bots/Waquet (1997), S. 24f.
- 101) Kühn (2016), S. 514f.
- 102) Stegeman (2005), S. 310–314.
- 103) Gädeke (2009), S. 40–43 において具体例があります。

## ENGLISH SUMMARY

### Introduction and Translation of Nora Gädeke's Lecture "Leibniz and His Correspondence"

MASUYAMA Hiroto

Dr. Nora Gädeke gave a guest lecture "Leibniz and His Correspondence" at Gakushuin University Institute for Research in Humanities on November 9, 2017. This paper is the Japanese translation of that entire lecture. As is well known, G. W. Leibniz had the most extensive correspondence among contemporary scholars. He had about 1,300 pen pals, and the number of letters he sent and received is approximately 20,000. This paper casts doubt on the typical view taken on Leibniz's correspondence, according to which he exchanged letters mainly with famous scholars in foreign countries for academic

debate. A quantitative analysis of his correspondence was conducted, and it revealed that quite a large part of his correspondence was intended for communicating with persons in his neighborhood, such as princes and professors in or near Hannover, and that his major interest in corresponding was not only scientific discourse, but also to gather information. As a result of the quantitative analysis and other considerations, this paper concludes that the study of Leibniz's correspondence gives a clue to clarify the reality of letter culture and academic community in the Barock era.

*Key Words:* Leibniz, Correspondence, learned republic, Network, letter culture